みちのく
寄稿

（株）水環境プランニング東北支店
亀田 則男

― 私と東北地方との縁について ―

１．はじめに

生まれも育ちも生粋の栃木人である私が、何の縁もゆかりもない東北支店の責任者になるとは夢にも思っていなかった。そんな私が東北地方に第一歩を記した日から今日までの 10 年の月日を振り返ってみたい。

2014 年 4 月から 2019 年 3 月までの 5 年間、私は任期付き公務員として東日本大震災津波により被災した岩手県大船渡市と宮城県名取市の復興事業に従事した。

本稿では、妻と共に被災地の仮設住宅に移り住み、被災者と共に生活を送りながら復興まちづくりを担当した岩手県大船渡市で過ごした 3 年間と、技術者人生で初めて温泉掘削を担当した宮城県名取市での 2 年間について思い出してみたい。

２．仮設住宅に 3 年間

自宅から車で 8 時間、岩手県大船渡市営野球場に建設された被災者用 6 軒長屋の集合仮設住宅が与えられた官舎だった。ドアのない３K の間取り。隣家との壁が薄く、隣人がテーブルに置く茶碗の音が聞こえ２軒隣のテレビの音も聞こえる。窓は二重サッシではあるが鉄の柱が剥き出しのため、気温が下がる真冬は結露で壁が凍る日常。あまりの寒さに部屋中を梱包材のプチプチで覆ったがそれでも寒かった。（写真-1）

妻は原因不明のめまいを発症、後から判明したが原因は傾いた床が原因。結構、大変な環境下での生活だった。

一方、楽しみもあった。ご近所さんとの交流。漁師の方からは、新鮮な海産物をたくさんいただいた。「口開け」と呼ばれる漁解禁日には、丼に山盛りの雲丹や鮑のお届けがあった。サンマの美味しさにも驚いた。炭焼きのサンマは格別な御馳走となった。

写真-1　３年間過ごした仮設住宅

新年会や季節ごとのお祭り行事など「集い」も多かった。(写真-2) 3年間で地元民の日常語である方言の「ケセン語」や祭りの踊りを沢山覚えた。今も再訪の折はケセン語の会話に戻る。

３．多重防御の復興まちづくり

写真-２　地域行事で踊る筆者

職場は大船渡市災害復興局に在籍した。復興局職員数 47～55 名/年度。局員の 6 割は派遣職員で構成され、年間 180 億～200 億円の復興事業を担当した。

私が担当したのは津波による浸水被害の大きかった JR 大船渡駅周辺地区 46.5 ヘクタールの土地区画整理事業。地区全体を 70 万立方の土砂で平均 2.5m 嵩上げ盛土しながら、駅やバスターミナルをはじめとする交通結節点やショッピングモール、ホテル、産直店などの都市機能施設を集積させ、早期に復興させることが役割であった。

岩手県が実施する大船渡湾防潮堤（計画高 TP＋7.5m）を第 1 線堤とし、山側に位置する JR 大船渡線を第 2 線堤（TP＋5.0m）とする多重防御のまちづくりの一端を担った。事業担当主任として、72 戸の家屋移転の工事ステップを作成、工事工程を遵守するために不可欠な関係機関協議に奔走した日々。次々と発現する工事課題への即時対応、無事完了し、努力が形となった時の達成感と喜びは、私にとって何物にも変えがたい大きな宝物となった。

写真-3 事業地区と事業メンバー

仮換地指定前の起工承諾方式の嵩上げ盛土工事の採用。工事工程管理に CCPM（クリティカル･チェーン･プロジェクト･マネジメント）の提案は事業遅延抑止に大きく寄与した。

コンストラクションマネジメント（CM 方式）による事業委託者の UR 都市再生機構･施工業者の東急･東洋･植木 JV と一体となり取り組み、被災地で顕在化していた技術者･技能労働者･資材不足の問題を乗り越え、段階的に「まち開き（エリアの部分竣工）」を果たした。(写真-3) 大船渡のまちづくりに関しては、現在も大船渡市より、立ち上げに参画したまちづくり会社「キャッセン大船渡」のアドバイザーを拝命し、助言を続けている。

４．技術士としての活動

全国各地で大船渡市の復興状況を伝える講演活動を実施。特に、平成 27 年 10 月に韓国春川市で開催された第 45 回日韓技術士国際会議の場において、大船渡市の復興状況を多方面に発表できたことは貴重な機会となった。

写真-4 フォーラムで発表する筆者

また、派遣職員仲間と連続出場した全日本わんこそば選手権や一関市もちマイスター取得、北海道稚内市での復興報告会など、ここに書ききれないほどの沢山の思い出を作ることができた。そのなかでも、静岡県浜松市や大阪府泉佐野市をはじめとする多くの自治体派遣職員との絆を構築できたことは大きな財産であり、今も定期的に交流を続けている。大船渡市での３年間は,私の技術者人生でも中身の濃い３年間となった。

５．人生初の温泉掘削

大船渡市での３年の任期を終えた私は、4 月から宮城県名取市都市計画課に赴任した。派遣元の説明では、温泉掘削を伴う大規模スポーツ施設の復旧事業を担当するとのこと。赴任早々、温泉掘削工事の発注に向け、休日を返上しての工事設計書作成。工事起案後も施設復旧に伴う関係機関協議や低入札工事への対応などで、一息ついた頃には、閑上の温泉掘削現場では秋の気配が漂い始めていた。

土木技術者として 30 余年、初めての温泉掘削である。専門外であるがこれも何かの縁と、持ち前の「興味津々の知りたがり症」の自分が現れる。日夜を問わず現場に出向いては、あれやこれやと現場代理人を質問攻めにする。現場代理人にすればたまったものではなかったかもしれないが、お陰様で恥ずかしくない程度の温泉掘削技術の知識を習得することができた。

写真-5 掘削現場で立会する筆者

現場の掘削予定深度は GL－1,200m。予定の工程は約半年である。だが、GL-400m の地点で基板岩が発現。硬い岩を掘削するため 24 時間掘削に変更し、3 か月遅れで予定深度までの掘削を終了した。

同時期、名取市ではこの温泉掘削に際し、大々的な事前告知や 1000 万円を目標とするクラウドファンディングを興していた。担当者として途轍もなくプレッシャーを感じていた。普段は信心深くない私もこの時ばかりは心の中で、温泉掘削の成功を祈った。

結果、無事に温泉は湧出した。市長がメディア会見で、「名取ゆりあげ温泉」と額に入った温泉名を掲示するテレビ画面を見ながら、一仕事が終った満足感と、日夜現場で頑張ってくれた現場代理人や技術者達を思い、ホッとしたことを今でもよく思い出す。

写真-6　造成中の名取市サイクルスポーツセンター

その後、施設復旧に関する開発許可など、国や宮城県との協議は時間的にも困難を極めたが、関係者の協力を得て、面積 26 ヘクタールの名取市サイクルスポーツセンターの造成工事を発注した。そして、2019 年 3 月、2 年間の派遣職員生活を終了した。

６．おわりに

縁もゆかりもなかった東北地方と縁を結んで 10 年が経過した今、私は㈱水環境プランニング東北支店の責任者として、20 名の従業員と共に東北地域の水インフラを守る業務に携わっている。自身の体もすっかり東北仕様になった。

支店開設に伴い、水コン協東北支部にも加入させていただいた。今後、様々な行事やイベント等でお世話になる機会も増えると思います。協会員各社の皆様にはご指導方お願い申し上げ、筆をおかせていただきます。

参考資料：第 45 回日韓技術士国際会議技術論文集「多重防御のまちづくり：亀田則男」より